

きます。あんな文章をかいた時は誰しも内々一寸得意になるものです。然し二年もたつて他人が同じやうな事をくりかへしてゐるのを見ると實に自分ながら冷汗が出るものです。自分も矢張り一度はこんな時期が有つたんだと思ふと實に悲觀します。然し湯川君のやうな生の歡喜者には此冷汗は遂に來ないかも知れません。むしろ其人の幸福の爲めに冷汗の時代の來ないのを望んでゐます。(十一月十五日附)

## 演說部々報

(第一回講演會)

大ニ、秋山高く龍田山の緑も錦を交へんとする時吾人は三百の新進の諸君を武夫原頭に迎へぬ、その喜中にエール大學卒業同志社大學教授牧野虎次氏並に岡山四教會堂の牧師安達清藏氏の來熊ありしを幸ひ歡迎演說會に先て九月十六日秋月の皎々たる夜端邦館に於て御講演を辱うしたり。永松委員の開會の辭、長船委員の「新しい努力の時代」てふ演說に次で安達氏拍手急霰の中に壇に上らる、演題は「科學と宗教」にて大要左の如し

科學と宗教とは智識と宗教といふことで換言すれば發見と價值といふことである兩者は互に相反應して或場合は互に助け或場合は互に争ひ此の關係の變化によつて宗教の盛な時もあり智識の盛な時もある。創世紀の Elean の庭 Adan Eye の時か

らは智が進んで Cain が Abel を殺して神に罰せられ浮浪人となつて人命の貴重なることを知り遂には戦争を以て人命を保護するに至つたが更に人智の進歩に従て人民は全世界よりも貴重なもの即ち萬物の靈長とさるゝに至つた創世紀の天地創造の歌にある思想即ち世界の Value は他の世界古文學に見出すことの出来ぬ大思想で世界の思想庫 Alexanderia の Library では創世紀第一章が他の總の思想を壓伏した。此の創世紀は科學ではなくて一篇の詩である。混沌たる世から秩序ある現世があらはれたといふのである。此の思想からユダヤ教が出来此から Jesus Christ が出現して新約全書が出来是に Greek や Rome の思想を混入してスコラ哲學となり更に尙ほ教會の思想となつて歐洲に無限の權威を振ふに至つた全時に歐洲の壓制大王となつたが人は更に大なるものを求めて近世の科學が起り望遠鏡で新しい天体が發見され顯微鏡で肉眼で見ぬ新世界を發見して進化の妙を味ひ宗教には更に新しい Value を加へた。科學は定まることなく常に新しい何物かを求めて止まないで更に優秀

なものを開拓せんとするのが現代で將來は動搖の時代である。然し乍ら一旦動搖の時代は決定すればそこに新しいねづもりをするのがベルグソンあたりの哲學で茲に新しい信仰、新しい宗教が起て来る。吾人は社會の創造者であるから吾が中に神ありとして働かねばならぬ。理屈で行き詰るも必要あれば必ず自ら作り出すといふ信念を持たねばならぬ實に「千方盡れども望を失はず」といふことが大切である日本の現状は十路盤上行き詰つて居る此の向ふに新天地を Create せねば日本を開展させることは出来ない。生氣潑瀾たる青年諸君は責を双肩に負ふて日本を Create すべき人である。

(拍手)

牧野氏再び雷の如き拍手中に登壇さる。題は新時代の新宗教にして縦横の講演の概要を記すれば。

或時エール大學で Baptism は現今やる様に水の一滴を頭に注ぐのは眞の Baptism でない身体の一部を浸すべしなごといつて甲論乙駁 Greek の事から引き出してゐたが此の時一年少博士は學生を叱り飛ばして「Baptism. かつて語は Greek ではない

い二千年前の死んだ詞はなくて二十世紀の生きた英語じや」といはれた。二千年前のキリスト教は二千年前のキリスト教で日本人は勿論ローマ人も加はらぬユダヤ人の宗教だつたが二十世紀のキリスト教はローマ人はたろか日本人も含み殊に日本人のキリスト教は日本人のキリスト教で他國のキリスト教ではない。又宗教には智識は要るとか要らぬとかいふが今日吾々の信念には智識ある事が最も必要である。スコットランドのロードケロビンがエール大學で H.L.D. の學位を受けらるゝ時三百の教授三千の學生の前で「自分は工學の原理の發見を以て総て神の賜とする天地宇宙は唯一人の神によりて支配さるゝもので形は變るも全じ *heavy* に基づくものです」と告白せられた様に科學に固まつた頭にも亦 *Spiritual Culture* があるのて一体宗教は愚夫愚婦の話と相距る遠からずして宗教と科學と相衝突する様に考ふるものがあるが決してそんなものではない吾々は軍人として政治家として腕を振ふ時一方には道德上宗教科になる餘裕があらたい。實に智識は宗教と兩立調和する

ものである。判らぬ事が出來ると信仰と科學とは衝突するといふがフリツプブルックスは「汝の信する所を信じ汝の疑ふ所を疑へ汝の信する所を疑ふなく汝の疑ふ所を信する勿れ」といつた。判らぬ事は幾つあつても判ることが一つあればよい一つの燈は能く暗黒の世界を征服する信念も斯くの方法である。又吾々は宗教とその *General Current* を見るべきもので如何に小さい處に入つても全体の方向を明に知て居らねばならぬ。又私が四年前ニウカレージ學長官舎でガビー博士に「日本教育界では倫理の權威は疑はぬが宗教の權威は認めぬ」といふた所が博士は卓を叩いて「我が同盟國たる日本では道德の外形たる倫理を認めてその内容たる宗教を認めぬか」と怒られた吾々が世界の大勢の *general current* を見る時は倫理は宗教信念を伴うて居る。又宗教は靈的要素を持つて居るがジエームスの説によると人は五感の外に眞理に感應する一感があつて此れ人と動物と異なる所であるといつて居る。人が眞を以て人に對する時

は反應がある。而して眞は人と人との間、天と地との間にあつて天地の間に此の眞の Impression されて居るのが宗教で昔から天と地との間には Spiritual Whirls の通信があつてゐたので之が祈禱である我が心で天に訴へるのを祈と言ひ人と人と心を傳ふるのを話といふ人が動物と異なるのは天地の間に祈り得ることである。エール大學に小さい半作りの圖書館がある之は全設計の四分之一が作つてあるので大學がまだ四分一分だけしか價値ない故であると實に之は全大學の二百年祭後の事である又ハーバード大學に小さい Museum がある之も大設計の後日を期する一部である由である設計は大きくて半出來のものは完成したものよりも價値がある吾々日本人は未成品であらねばならぬ天地不可解でも千年二千年待つ心でなければ宗教家にはなれない。宗教は理想と現實の Process にあるもので未成品で通れるものである。諸君學校卒業後も否一代否子孫も未成品で總てが成るのは神エホバの時ばかりである。(拍手)

委員永松の閉會の辭にて會を終る時に十時半、由比

宇佐美兩先生を初めとし聴衆堂に滿ち殊に新入生諸君、多かりしは喜ぶべし。(委員)

## 劍道部員上洛記

風伯頻りに狂號し六花續紛と舞ふ此時閑居行火を擁し徒なる安逸に執着するは僕輩青年の正に唾棄せんとする所たり。床中の殘夢醒め難く餘溫の蠱惑甚しき霜の朝蹶然起つて竹刀を振へば一虎嘯いて百獸走るの慨油然として湧く。此間に味到する痛烈の快感は蓋し脆弱輩の未だ曾つて想及ばざる處なるべし比叡風肌を劈くが如く殺到して天地萬有皆寒氣に萎縮せる時獨り宇宙の沈滞を覺醒し洛陽城頭劍柄を案じて凱歌を高唱す。人生れて男子たらば此の心境に到達せざるを以て終世の大恨事ならずとせんや。茲にしばらく柔筆を呵して這般の梗概を報せんとす。劍取る手にならぬ筆の鈍り勝る讀者希くは之を諒せよ。

少しも誇張的分子を交へずに思へば短かい數ふれば長い三月の間選手達が備さに臥薪嘗膽の辛苦を経験した事は苟も彼等が知るもの等しく首肯する處で

あらう。其の苦しかつた月日も一聲の汽笛を一劃線として静かな過去の思出の中に葬つて行手には華やかな希望に憧憬れ乍ら……尤も其の背後から冷たい責任と云ふものが暗く重い壓迫を加へて居た；……熊本を立つたのが大正二年も押詰まつた師走の廿五日であつた。送る人も送らるゝ人も共に語らず囑望と奨励と感謝と無限の慨は只一脈の暗涙にあふれ無言の間心霊と心霊とは相觸れ相通じて選手の決心は彌が上にも固くなつた。車室の棚に處せまき迄たき列ねた艶々しい林檎や蜜柑は旅情の慰めにと知友の贈物である。運命……暗黒か光明か……の潜在で居る目的地に近よるに連れて一種の不安と異様の歡喜が紛糾がり纏れあつて強ひて骨牌や詩歌の合唱等にまぎらしても一寸した隙から其運命の展開した刹那の想像が忍寄つて來て我ともなく心臓の鼓動が高まるのであつた。塗り付けた如くに集つた門司の燈火と暗い海峡を流星の如に走り廻るランチの檣燈の織る文を二十五日最終の印象として明けた。廿六日窓外の印象は須磨明石にはじまる。一本一本の松の根元からも一波のさざめきからも其波に乗つた一

羽の千鳥からも絢爛な物語りがあみ出されさうな舞子の濱の朝景色平家の公達が遺瀨無い戀の思を泣いて千鳥に訴へた事もあらうし源氏が前半の華麗な生を現在の冷酷な不運の黒い戸帳から振り返つた事もあらう等と想像を逞しうする中に身は最早神戸驛の人である。大坂大坂と呼ぶ驛夫の聲に此處も我が敵の地であつたと新なる敵愾心が湧く。高莊な白堊の三樂莊を左後に汽車は七條の停車場に入つた。由來京都と熊本は武術界に於て將軍家と水戸家との關係がある。先輩諸氏や武專の井上君又夫れ夫れの知己朋友多く我行を迎へて呉れる。休道他郷多苦辛……握手破顔久瀾を叙すれば旅勞薄靄の如く消えて吾人が苦衷の幾分は此處に報いられたやうな氣がする。市電に托して取廣められたる街筋を走る數分午後四時疎水通西入北詰松榮館階上の客となつた。階上は眼下疎水の清冽に臨み四時咽ぶが如き滄々の響耳邊に通ふ。窓外遠く東山大文字岳を指點し夜半夢醒めて……川風寒く千鳥鳴くと言ふ京女の柔らかな寂しい聲で歌はれるあの名物の鳴音が枕に通ふ事もある位鴨川に近いのである。

此日野球部は六高に敗れた。何糞と云ふ劇しい反撥心は起きても尙心には重い重い壓石が懸つた。薄曇つた空から鈍い西日の光が射して音もよく垂れた優勝旗が妙に萎れた選手のいぢらしい姿と對照して其の場の光景が熬付けられた如に頭の底に残つた。

廿七日朝日がギラギラ疎水に反射する頃起床十二時まで大學道場に於て稽古。二百里の旅も思つた程元氣を消耗さして居ない。胸には新なる希望が燃ゆる野球部四高に大勝。夜は集合所階上の大廣間で大學先輩より歓迎慰勞の會を辱うす。歴史上傳説上吾等が胸に不絶憧憬の泉をはぐくむ京の町其も重大な責任を終る迄はと遠く四條わたりに仄のり染まつた明みを眺めやつたまゝ、電車の唸を聞きつゝ、眠に就いた廿八日。武徳殿に於て大日本武徳専門學校の生徒を向ふ一廻しての稽古である。參加學校六個の中五高より六人の外は一人か二人若くは皆無のあさましい有様であつた。是れ技術を看取せらるゝと云ふ女々しい根性から出たのであつて我部も許でない病人の四人が休養した事は多少の恨無いではなかつた。男子將に正々堂々の陣を須ふべく小人鼠輩私やかに

脳味噌を絞つて小權謀術數に頼る少しく理想の活眼を展いて己が蠢々の醜骸に驚嘆せよとでも云ひ度い位であつた。終つて武專の食堂で猪汁の饗應あり。

武術界では一騎當千の荒武者が持ち習はぬ盆を捧げ「御代りは」「澤山ありますから御遠慮なく」など武骨乍らの愛嬌で幹旋大に力めたのは此日の嬉しい思出である。我部の佐々木七杯を平げて大に荒武者の膽を挫いだとは虚か實か讀者の判斷に任せる。

薄暮集會所内で抽籤組合せを定めて居ると喊聲雷の如く塀外に起る。三高が七高に勝つて歸るのであつた。多少の感慨……………

組合せと歸序は左の如く定まつた

・廿九日 第一回 四高―五高

第二回 三高―八高

第三回 三高―大坂高醫

第四回 八高―東寺大學

三十日 第一回 三高―東寺大學

五高 大坂高醫

廿九日 今日には愈會戰の第一日である。敵の策戰豫知すべからず昨夜、鶴田師範大野君と額を鳩め畫策成つて配備の陣立左の如し。

四 高

五 高

眞繼 某

大槻 誠也

新田 義實

原田 士驥雄

●木 万吉

曾布川 征夫

宗接 鶴榮

石坂 繁

小坂 嘉一郎

石々木 政吉

山本 興吉

則元 卯太郎

高橋 良策

江島 秀

國岡 連樹

武藤 義就

副將 福島 藤次郎

加藤 尊正 副將

大將 湯野川 國左右

中村 政記 大將

勝敗は最後の五分間にあり

と雖最初の五分間之れ又生死の二道の分岐点なり。

大槻沈着劈頭敵の精銳三人を切る。進退

機に適ひ陰陽變化の妙正に戦士の學ぶべき所味方の爲に万丈の氣を吐き我軍忽ち喜色漲る。然れど敵鋒決して鈍さに非ず前途尙窺視し難くして胸中一脈の不安あり。

宗接は往年の大津留將軍を髣髴せるもの飛鳥の如く躍り込み様胴を割る手練の程悔り難しと見る間に大槻原田曾布川バタバタと殞れぬ。

石坂は我部の痛快男子色黒けれども文にも亦秀づ。彼が江戸ツ子氣前の生一本の大刀振り息をもつかせず續け打の面に宗接を屠りたれど惜しむべし軍神幸を垂るるに吝にして小坂が爲に花徒らに散りぬ。

巨象の如き懸聲泰山の如き身の構へ一度身を挺して敵に肉薄すれば辟易する三舍利劍空に舞ふや光鎧電光の如く端倪す可らざる此れ我部の佐々木となす。

加ふるに彼去日猪汁數杯を盡して銳氣十倍阿修羅の如く荒れ廻つて敵陣紛亂中備への驍將首さるゝ事四人に及び鎧袖一觸草木風なきに靡いて溜飲三斗一氣に吐盡せるの快あり。茲に副將福島は早も身近に攻め寄する四方田但馬の如き剛敵に心中思ひ定むる所やありけむ故更に平然を裝ふて騒色なく倨傲横柄血を見て勇む佐々木が面上まあ待てと云はぬばかりに睨み据ゑつ。佐々木焦つて打込む腕の隙やありけむ一合二合あはれ九切の功を一簧に欠いで果敢無くなりし心中思ひやるだに哀也。艶なる花の力彌が姿か須磨の浦わの敦盛か何れ劣らぬ花武者は名を則元と江島と謳はれ初陣ならねど若き身は只急ぎに急き焦りに焦りてあつたら落花に觀衆の袖を絞らせぬ

武藤又も焦急事を過り技には敵を凌ぎ乍ら無念福島が鋒尖に斃る。かくて兩軍は死屍累々として埋高く殘る者僅かに四人今や副將と副將が人交へせぬ一騎討四隣鳴を鎮めて腥風縦横に場を狂ふ。兩人の一舉

手一投足是れ勝敗の岐るゝ所御大中村が胴ふるひも蓋し武者振のみにあらざりき。清正公の偉靈熊城より感應飛來ましゝか皇天我に幸せるか福島遂に加藤の爲に敗れぬ。三百年以前も福島は加藤に勝てなかつたなど酒落所にあらず。勝敗の數殆んど茲に定まり次く御大湯野川は曾つて東都の副將今や金澤の牛耳を取る者勇名天下に隠れ無き武夫とは云へ又如何ともすべからず此の冷膽の接戦は我軍の勝に歸しぬ。我曾つて箱根の棧道を行く。小暗き杉の並木を出づれば忽然として深碧の湖水眼前に展開し仰げば芙蓉の靈峯千古の雪を載せて雲上に超脱す。遮般の心裡正に以て比す可し矣。

四高は必勝を期したりと聞く。期必勝同志の會戰勝も負くるも感慨無量後年の大敵は必らずや四高なるべし。三高は三人を残して八高を破り四高は五人を残して高醫に勝ちぬ。國岡九人を屠つて驍名を馳す於茲佐々木は功名帳の第一に記録せらるべきものたり。八高は五人を残して東寺大學に勝てり。

日暮れんとす。遠く東山に卻する歡聲は八高が野球部優勝試合に三高を斃して月の桂を擁しての狂喜の

叫也。一痕の月影淡く玻璃窓に宿る頃一同集會所階上に會して胸襟を開いて談笑す。大學劍道部の招待による。美聲を絞つて朗々と吟じ出す、山川草木轉荒寥。十里風腥新戰場。吟聲は緩やかに四壁に卻しつゝ消れぬ。戰士の胸中果して夫れ何者が往來せる。卅日。朝來雲低く迷ひ凍風銳鋒の如く一直線の街道に狂ひぬ。三高東寺大學に勝たんか我は高醫を破るも尙一敵の残れるあり。難か易か。心臓の鼓動止んとして能はず。

然るに愈々三高對東寺の開戦となるや東寺副將の奮戦は案外の結果を生みて茲に三高は八高に八高は東寺に東寺は三高に勝つてふ滑稽なる皮肉眞に滑稽なる皮肉を吾人が苦笑の前に提供しぬ。勝敗の上を以て見れば何れが眞に優れりや何れが眞に劣れるか遂に判断の持つて行き處あらざる也。於是我若し高醫に一籌を輸さば各校皆一勝一敗の成績にて試合は又最初より繰返されざる可らず。難か易か。是れ期せずして數百の選手觀衆の胸にゑがかれたる刹那の感懷なるべし。午前十時半開戦の令下る。高醫は運動界の大立物、校長又運動に多大の興趣を抱き必勝の



望なくんば未曾つて遠征を肯せし事なしと聞く。さなくとも昨日四高に敗れし鬱憤は我に發し且つ一勝一敗となる時は前途必らずしも悲觀すべからざるを以て彼等が死物狂の突撃を覺悟せざる可らず。群衆はゴクリと固唾を呑みぬ。

大坂高醫

五 高

井關 健夫

大槻 誠也

井關は對四高戰には第三將

山 越 舛

曾布川 征夫

を務めしもの

石井 貫一

江島 秀

大槻不振朋を

大西 孝次郎

則元 卯太郎

突かれて倒る

深見了諦

佐々木 政吉

曾布川代れり

三宅 旭勝

原田 士驥雄

彼は玉中の副

多羅尾 雅治

石坂 繁

將として大將

芦名 泰

武藤 義就

青木を輔け斯

副將二川 節夫

加藤 尊正

界の重鎮を爲

大將高木 三平

中村 政記

す。彼に取て今日の戦は會稽雪辱の好機たり。語るも聞くも痛快限なきは彼が武者振なりき。徹頭徹尾

攻撃に出で彼の猛豹が山河を躍越わ群羊を驅る如く天爲に驚き地爲に動く。敵の戦士彼が刀尖に死するもの五人三宅出でて曾布川退きぬ。劍界にわいて三

宅の名を聞く久し。名を旭勝と稱すれども筑前琵琶の巧拙は保証の限りにあらず。彼こそ眞に我等が腕の好試金石江島の輕快彼の六技と纏れて陽炎と乱れぬ。大液芙蓉未央柳……芙蓉の如く柳の如き若武者二人又もや紅血と化して徒らに虞美人草に培ひつ。此恨綿々として盡くる時なかるべし。佐々木の吊戰

万人の期待に背いて空しく三宅に名をなさしめぬ。

彼の敗は敵に十倍の力を與へ味方に十倍の兵氣沮喪

す。原田斃れ石坂出づ。眞に彼は痛快男子なる哉。

我は彼を稱してザファウンダーオブ五高劍道部の讚

辞を呈するも尙足らざるの感あり。勝誇る三宅の利

鋒を止めて味方の爲に虹の如き氣を吐く。多羅尾に

一步を譲りたりと雖彼の勳功は炳として青史に滅す

る事なかるべし。彼少しく小成に安んずる嫌あり。

爲に惜む事切なり。力めよや好漢。

本領發揮 武藤の本領は此日はじめて發揮せられぬ

彼の面と体構は苟も劍取る者の推賞し措ざる所熊本

劍界の寵兒隠せる能爪を顯はして大鵬の如く翔り猛

鷲の如く狂ひ一撃三万里巨翼を張れば南冥爲に暗く

雲慘として乱る。三四兩將を斃し劍界の玉椿とも稱

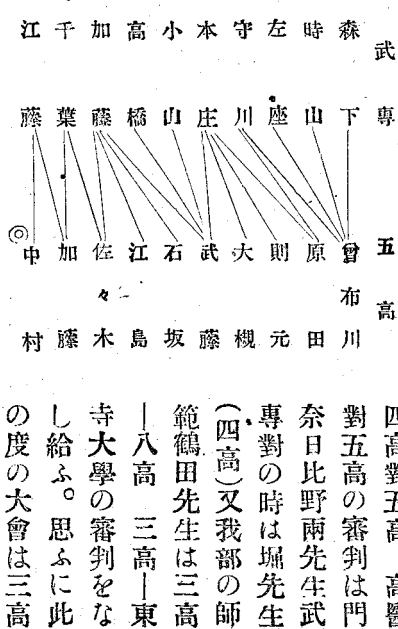
す。

すべき二川を斬つて大將高木の手許に躍進す。高木屢危かりしも能く戦ひ我部は再び副將の出陣を見るに至れり。大厦の倒れんとするや一木の能く支ふる處にあらずとか。幸運の羽に乗じて大空を行く我部の威勢よく遮るものなし。高木倒れて敵影全く無し。月前戈を取つて月に歌へば千里雲霽れて虜騎遠く去るの慨優勝旗を擁して歡樂に涙する選手胸中に往來す。時に驟雨沛然として至り悲の涙か喜の涙かどまれ胸裏の鬱懷全く消れて身はこれ微笑みて泣く感腸の高調に浸る。夢?現?夢ならば醒めざれ現ならば相抱擁して急律の感激に泣かん。

庭前旗を擁し先輩と共に小影を撮る。大坂朝日新聞社は故ら一員を派して吾人の小影を紙上に掲載するの榮を興へたり。子供らしき悅樂の波に浴して嬉々道場内に跳梁す。咎むるを止めよ。富を得たるの樂にあらず。虚榮の夢に非ず。身万斤の責任を果して熱血流汗以て天下の覇たる名を負ひたる也。友ならば相共に喜び心あらば相共に泣け。時利に汲々として只利己の醜に執着せば汝の苦を苦に樂を樂にする眞友遂に得べからず。

須叟にして雨止む。雨後の空猶寒く雲暗憺たれども此の晴れやかなる心に一點の陰影も留る事能はず。午後三時より番外として武徳専門學校一學年對の紅白勝負をなす。其の結果左の如し。

御大中村此時はじめて出陣あり。離れ打の面と寄り打の籠手を以て敵の大將を斃す。於茲我部の大將は決して床の置物たらざるを闡明し御大の肩伸ぶ。



八高東寺と比較的弱腰連が一グループを構成し四高五高高醫と強者連(と言ふも決して手前味噌にあらず)一グループを構成す。事偶然に出づと雖此處ら

が天の配劑の妙と言ふべき所ならん。二戰二敗せる高醫は決して他のグループの何れに比しても遜色あるに非らず。却つて悠々二戰二勝せし事を疑はざるもの也或る校が二敗するか或は各校一勝一敗にて滑稽なる皮肉を呈するか其の何れかは斯の如き事情にたいて當然出來すべき結果たり。我は高醫に對して俄青道心の爲に一掬同情の涙を惜む者に非ず。若し高醫と所を代へば我又髮無眉の沙門なるべければなり。蓋し切磋琢磨の友として永久我部の他山の石は四高と高醫なる事を明言して憚らざるものなり。三高昔日の面影なく八高東寺又……否否止まん哉！止まん哉。毀謗は男子の事にあらざりき。

此夜有志相集りて祝宴を張る。武德會の名士。中野齋村。大島。古賀。の四先生特に駕を柱げて吾人の爲に祝意を表せらる。席に二輪の美花あり。兄を清弟を彰と呼び鴨水の清流に育つ白面紅唇の美小年萬緑叢中紅一点のほひ艶なりき。三絃の音無く柳腰楚々の嬌態なしと雖金色燦として優勝旗に映え妄念全く跡を断ちて僅か一献の酒によく酔をなす。心中只斯れ『快』ありし而已。

#### 附記

京大の大野君と東大の中村徳之君は特に慰撫獎勵のためとて下熊あり。樋口芳包君又態々東都より上落。京大の浦本。本田。君等と共に親身も及ばぬ幹旋の勞を取つて下さつた。九大の大塲君亦多忙の貴重なる時間を割いて門司埠頭まで御見送あり。何かに就けて先輩諸氏の御配慮實に以て感謝の辞に窮する次第である。

遠征費の御寄附に就ては御禮の端書差上げていたけれどども若し萬一洩れた御方は何卒不惡御寛容下さい乍末筆費用多端の際にも係らず應援費募集に快く應じて下さつた教職員校友諸氏に甚深の謝意を呈します。(一委員)

### 九州中等學校聯合野球大會

何とか振興策を施して刺戟を與へなければ、九州の球界は世間から存在を認められない程沈滞しさうであつた。熊本縣内でも中學程度の學校は數多い。でもその大部分は數年前に於ける野球大會の些細な事項の爲に野球部といふものゝ實在を失うて居る。

只熊本師範と商業とがバットとミットに親しんで居るばかりだ。振はない事夥しい。毎日武夫頭でボールを擲つて居る吾等は、かうした四圍の状況に限りなき寂寞を感ぜない譯にはゆかなかつた。

どうだい野球大會を昔に復活させて一花咲かせやうぢやないか。と連中の意見は忽ち一致した。電報が飛ぶ。委員が勧誘に出掛ける。参加するといふ學校が纏めて七つ。曰く。熊本師範、商業、柳河傳習八女中學。久留米明善、久留米商業。福岡修猷といふ顔ぶれ。どうやら事態は面白さうな色彩を帯びて來た。

大會は大正最初の天長佳節より十一月一日、二日と三日間に行ふ事とした。頃しも仲秋の末つ方、龍田姫の織りなせる龍田山の紅葉は二月の花よりも紅に、濃厚な松の緑のすさま洩る本館の赤い煉瓦色は好球兒に武夫原頭の活劇を偲ばせた。

中學の選手が大會前に武夫原頭へ來て練習を始める浦若いチャンピオンが白いユニホームに躍る赤い血を包んで熱球を飛ばし、球を追うて走る。大會前から大した景氣だ。

鳶の輪高く、菊の香迷ふ十月卅一日の午後一時二十分熊本師範對柳河傳習の仕合によつて先づ大會の蓋は開かれた。審判は五高の久坂と古賀。

傳習軍が先攻で戸次劈頭に左翼越のホームランで一點を揚げ先づ大景氣を添ふ。師範も一回目に村上麻生の安全打ありて二點を占む。尙師範は二回目一點、五回目に二點、六回目九回目に一點宛得點して合計七點。傳習は二、三四回共甚だ振はなかつたが五回目に軟打と敵の過失により、一擧にして四點を得、七回目亦全じ手段と方法により五點を得、合計十點。師範は惜しい所で負けたが打撃は見るべきものがあつた。双方技相伯仲して手に汗を握せらる好仕合だつた。熱狂した觀客も随分多かつた。

師範 田立口上 生行野中本 安全球七、(二壘打、麻生) 吉足川村麻兼長田塚 三振拾、(吉) 四死球二(吉)

C SS RF LF CF 3B 1B 2B P 得點七  
安全球七(本壘打、戸次、二)

傳習 住留森田野石檀戸吉 壘打、檀) 三振二、(塚) 四死  
習 吉川 代口橋 次開 球四、(塚) 得點拾

第二回。此の仕合が濟むとすぐ熊商對明善の仕合が始まる。時に三時四十分。審判は五高の橋本と勝部。

商業軍は選手欲乏で傭兵を驅り集めたらしい。がらんとした穴が多い。へまな過失とバントに對する用意がなかつたため、陣形大に攪亂され、七回目迄で明善は十點。商業は一點も取れさうにない。暮れ易い秋の夕陽は金峯山に沈んで黄昏が次第に迫つて来た。七回迄で商業兜を抜いであつた。

商業 邊田 星見 村地 山崎 安全球〇  
佃 渡上 赤高 中築 中上 三振拾一 四死球〇

CF SS 2B C P 1B RF LF 3B 得點〇  
安全球六

明 今中 藤當 武鎌 中木 佐 三振三 四死球二  
善 村村 吉安 藤田 尾下 藤 得點拾

第三回。十一月一日になつて福岡修猷と八女中學とが出陣する。五高大會には初見々の兩校が今日は互に鎬を削る事となる。だが都合によつて午前中に昨日の一勝者傳習と明善が活劇を演ずる事となつた。双方共大事な仕合だから輕舉に出でない。應援隊が東と南に分れて應援する、火の出るやうな仕合が發現しやうとは誰しも豫想して居た事だつた。でも豫想と現實は仲々一致しない。拾四對壹で傳習軍が大敗しやうとは實の所案外だつた。明善は一回に一點、

二回に二點、三回に五點、てな調子で打ちまくる。流石の傳習も手の出しやうがなかつた。元氣に乏しかつたのと氣負けて居たといふ事實は益々スコアを大ならしめた。

傳習 安全球四。三振八。四死球二。得點一。

明善 安全球五。三振五。四死球八。善得點拾四。

第四回。二時四十分から湯川と古賀との審判で八女對修猷のマッチが開始さる。昨日から景氣づいた武夫原頭には觀客が一杯。古い形容詞で立錐の餘地なしといふ所だ。新進氣鋭な八女は大に奮闘したけれども老練な修猷には一籌を輸せねばならなかつた。

修猷 田紫 島濱 田野 木部 田 安全球三。

山筑 綱長 廣栗 幸占 點 三振拾。四死掟九。

C LF 3B SS 2B CF P RF 1B 得點拾參。  
安全球六。

八女 今高山 伊形 坂平 稻江 三振拾二。四死球六。  
里橋 下藤 野本 木津 口 得點九。

第五回。時は十一月二日の日曜。秋天高く馬肥るといふ大變な好天氣で朝まだきから野次馬が武夫原頭さして押しよせる。午前十時四十分といふのに橋本、勝部のプレイボールの宣告で修猷對傳習の勝負が始

まる。グラウンドが一つで足りぬから南の方の假グラウンドで行ふ。

修猷は一回目に二点をあげて景氣づき、五回に又二点で合計四点となる。傳習は三回目に三点、四回目に二点を算して合計五点。八回迄は四對五で傳習の勝ち。九回目が大變だ。修猷二死者の後傳習一壘のちよつとしたミスが破綻の原となり一舉にして四点を得られ大勢如何ともする能はざるに至つた。傳習も恢復につとめたが遂に果敢ない努力であつたといふ事を見出した。實に惜しい負け方であつた。

(傳習) 安全球一、三振十一、四死球七、得点五、

(修猷) 安全球〇、三振五、四死球二、得点八、

第六回。修猷對傳習の仕台と同時刻に本グラウンドで師範對八女のマツチが始まる。師範からは大勢な野次隊が附屬の小學生を連れて應援に來る。若々しい音律の高い小學生の聲援は可也の効果は慥かにある。孤軍奮闘の八女には五高生の殆どすべてが熱狂的な應援を浴びせた。師範はよく打つた。六回で既に十一点。八女は僅かに一点だ。此れでは逆も駄目だと思つたら七回目になつて五高應援隊が獨特の活躍振

りを發揮する。八女が調子に乗つて元氣づく。痛打り又痛打。一舉にして七点を得。師範今や累卵の危きに至つた。師範七回目に一点を得て十二点となる。

八女は八回と九回で三点を得て十一點。僅か一点で八女が負けし事のそれが如何に口惜しくありしよ!!

(師範) 安全球八、四死球二、三振三、得点拾二プラスA、

(八女) 安全球七、四死球八、三振四、得点十一、

第七回優勝仕台。濃紫色の優勝旗が東方ベンチの隅にひらくとなびく。水蒸氣の少ない秋の空は晴れて健兒の腕に血が躍る。愈々二勝者明善と修猷との優勝仕台となる。審判は勝部と橋本。

二時十五分プレートの宣告が下る。先づ鼓動の高まつた手に應援旗を持つた應援隊が片唾を飲む。明善は例の健實な戦法で四回迄に五点を得。修猷は零。之れでは明善が勝つだらうと思つて居たが七回目から風雲が頗る怪しくなつた。すさまじい人の聲と應援旗のひらめきと石油罐の騒がましさが手傳つて應援の効果が大にあがる、明善が堅くなつてへまなエラ一をやる。修猷が隙に乗じて元氣づく、六回目に三點、七回目に一点、八回目に三點で合計して見ると

七点。明善も恁麼筈ではなかつたとあせる。でもあせればあせる程不利な状態に落ちて了ふ。たけり狂ふ野次の怒號の裡に明善は脆くも敗れて了つた。

優勝した修猷の選手は充實した喜と誇とを顔面筋肉に表はして優勝旗を授かる。萬歳の聲が起る。烈しい聲援に疲れた野次隊が喜憂交々分れて歸つて行く。荒れ狂つた大嵐の後の様に武夫原頭には千切れた旗の片と擲き潰された石油罐の殘骸とが無雜作に抛り出され、寂莫と闇黒とが迫つて來る。

勝ち誇れる修猷館選手よ！ 君等が記録せし武夫原頭の活劇は君等の野球史に如何に光榮ある頁として華やかな二重丸が附せられる事であらう。

必勝を期して不運にも敗れし明善選手よ！ 松吹く風に誘はれて其處に一掬の涙ある事は誰しも同情する所だ。弱々しい秋の夕日に照らされてしほ

／＼と歸つて行く君等が陰蔭の薄いその悲哀は千愁萬恨綿々として盡きないであらう。若いチャンピオンの人達よ！ 痛むことをやめて捲土重來せよ！！

(委員)

## 弓術部報

射 初 式

十月四日午後一時より第一學期射初式を舉行す出席者十七名盛會には非ざるも一騎當千の武士のみなり例によりて六寸的十射餘興として射拔を行ふ授賞者左の如し

尺二、的 三好君、谷川君、大山君

一等 谷川君 二等 坂本師範 三等 町野君

四等 永松(陽)君 五等 大山君 六等 萩島君

七等 永松君 八等 三好君

射拔 永松(陽)君

秋 期 大 會

十一月八日の好天氣に秋期大會を開く各學校の來賓多く三十五名に達せり當日は本校會員史に振はず來賓の爲めに名をなさしめしは遺憾とする所なり。授賞者左如

尺二的 吉水君(來) 谷川君、町野君、富島君、小倉君

一等 横山君(高工) 二等 谷川君 三等 富島君(來)

四等 吉水君(來) 五等 萩島君 六等 許斐君

七等 鶴君 八等 佐伯君 九等 永松君

十等 田沼君(藥專)

射納式は習學寮閉鎖其他事情の爲め終に舉行し得ざ

りしは是又遺憾とする所なり。

### 進級者如左

進三級 谷川清水 大山興一郎

進四級 許斐氏名

進五級 荻島一 三好三郎 永松統治

進六級 上村實 糸永小一郎 久保晋 古賀正巳 三戸豊吉

神方友介 中村金藏 太田信吉

## 水泳部報

三伏の酷暑に苦しむ者は唐津に來れ而して我が水泳部に遊べ。涼風忽ち炎帝の蒸熱を拂はん、蒲柳の質に苦しむ人は唐津に遊べ。オゾン充滿せる玄海の風と生ける玄海の波浪とは汝の肺を強め血液を増し適宜の運動を興へて強健なる身体をつくらん。

苦悶憂思に腦を痛むる者は唐津に來れ清涼爽快の景色は汝の憂苦を打破して雄志を養ひ以て膽を練らん唐津に遊びし龍南健兒を見よ如何にその筋骨の逞しきかを。如何輕快洒脫の氣あるかを。活潑進取の氣象は身体の鍛練と精神の練磨とによりて得らる。大正の男子、天下に活動せんと欲する者は水泳部に來れ。然して身心を健全ならしめよ。

唐津に遊びし事なき者は唐津の善惡を口にする勿れ南瓜の美味は食して始めて知るを得る如く唐津の眞價は唐津に遊びて初めて知るを得ん唐津に遊べ然して吾が水泳部の如何に美味なるを味へいざや本年度水泳部々員の活動を示さん。

七月十四日、晴天、

來會者、古川、岡本、高橋、渡邊、濱田、

兼ての交渉の結果本年度水泳部合宿所と定まつてゐた唐津虹之松原海濱院に余が着いたのは昨十三日の夜だつた。旅館には既に、大塚、宇木の兩君が來て居たので萬事に都合だつた。

昨日の疲れのあつたのに拘らず朝早く目がさめたので海岸に出て見た鏡山から吹き下ろす曉風は眠れる松樹をゆり動かしハラ／＼と銀砂の上に落つる松の露は恰度雨の降る様に見えた。唐津灣内は鏡の様に穩かでこゝがあの玄海の荒波の來るところかと思はれる位であつた。チャラ／＼とやさしい音の足下に響くのは汀に寄する漣のために貝殻のなる音であつた沖の島々は朝霧につままれて影さへ見えず空と白鳥と見へるのは浮ぶ漁船の眞帆、片帆であつた。二



里に亘れる虹之松原の白砂青松は遠ざかるにつれ淡れゆく機恰も暈し繪の様であつた。岸に集ふ印度人の一團はこの附近の漁夫等でホイイ、くくと元氣な聲を出して網を引いてゐた。自分もやがてはこの漁夫等の様に黒くなると云ふ事は夢にも知らずにほんとに黒い人々だと見られてゐたのも後から考へると笑止の至りであつた。

今日は未だ自炊でなく堂々たる御客さんだから大威張で朝の石炭を腹につめ込んでゐる處に唐津から三部の古川君が來られた。同君を見ると鍛つたと見えて羨ましい程黒くなつてゐるので堪へられず早速色づけにと出掛けた。明日は多くの部員の來る筈だから我々委員たる者は黒い事だけは一日の長なかる可らずと勝手な理屈をつけて數時間泳いで干し、干しては泳ぐと云ふ風にやつたので龜の甲羅でない我々の脊は眞赤に腫れて痛み出し大に弱つた。

午後熊本から炊夫も來たので海濱院に預けてあつた水泳部代々の遺産を受取りそれぞれ處置をつけそれから古川君を案内者として必要品の購求に出で色々な品物を買つて暑い日中を汗だらだらで歸つて來た

夕食の最中に前委員岡本君は高折君と共に、ついで渡邊、濱田の兩君も來宿せらる夜は雜用に追はれて十一時過就寢 但し今日の天罰で仰向にねる事出來ず腹這になつて三人ながら寢たのは滑稽だつた。

七月十五日 晴天、

來會者 原田、内田、吉賀、

一昨年、昨年兩度の水泳部日誌を見ると雨に降られた愚痴こぼしで初めのページは終つてゐるが今年は雨でなく火の降りさうな好天氣であつた。

本日が水泳部開會の當日とて例年によれば開場式をやる事になつてゐたが本年は未だ部員も少なく且つ師範も來られてゐないから師範の歡迎會と一しよにする事とした。然し午前午后の二回入水して各自に練習した。

正午までは宿附とて大にバクついたので下女の波さんさらぬだに大きな目を一層大きくした。

夕食から自炊に移つたので晝間の忙しい、事林橋の様に腫れた脊を出してとび廻つた。

七月十六日 快晴

來會者 川上、神崎、橋崎、影浦、野中、江島、

開會して僅かに一日なるに集まる者既に二十名に達せんとすとは盛んなるかなだ、

午前午後の練習は又各自の腕だめしとした誰の發見か始あるを知りてより皆にてあさり忽ちにしてバケツ一杯晝の食膳を賑はせた。

七月十七日 晴天、

故有栖川宮威仁親王殿下の國葬當日とて我々部員一同練習中止して謹慎した  
午后、加藤師範、細川第三回水泳部委員來會す、

七月十八日 曇、風強し

來會者 青木、峯、辻、町野、樋渡、

天曇りて北風強く玄海の怒濤は白波を立て轟々として間斷なく寄せ來り打上る様凄じき極であつた午前十時鐘をならして入水準備を傳へた部員一同裸体となつて水褌をしめ水泳帽をかぶつて海岸に集まつた師範から入水前後の注意。水褌のしめかたについて御話があつた。波浪が高いので練習隨意とした。腕に覺わのある部員は物凄くうなづてゐる海の中に跳びこんで衝き來る巨濤をものともせず乗りこゑ乗りこゑ泳ぐ様水鳥の波に遊べる如く見るから痛快の至り

であつた。

午後五時から師範の歡迎會を開いた。晚餐には玄海の珍珠の外汁粉あり甘黨の士を喜ばす夜に入りて茶話會に移つた、名物松原こしをかじり夏蜜柑に顔をしかめて談笑する二十余名の一大家族團欒する様同宿の毛唐も羨ましかつたと見ね廊下に椅子を持ち出して切りにこちらを眺めてゐた。話しの種子が切れて來たので自分の發案で德利廻しを始め當つた人が歌う事としたので騒は一段烈しくなつた興未だ全くつきなかつたけれど更けた事とて西洋人の安眠を妨害するのも氣の毒と水泳部萬歳聲裡に閉會した。

七月十九日 雨後晴、風強し

降りつゝありし雨も午前十時頃に止み雲間からは陽光洩れそめたので級外の人々の級定めせんとしたが波高かりし故中止練習も亦中止。

七月二十日 曇雨、波高し、

來會者 張、藤山、

二日間も海が荒れたので今日は屹度穩であらうと一人合點で極めこんで朝早起して、犬塚君と共に満島に舟受取りに行つた。渡船場で舟の準備が出来るま

でと舞鶴公園に上つた。虹の松原から眺める景色とは全く一變してはゐるが又よい眺望であつた。高島から通ふて來る小船は後に白い帯の様な跡を残してゐるのまで見わたるので、犬塚君と二人で天候のよかつたのを喜んでいた。然るに一陣の烈風來ると見るまに空は曇り波高くなり静かであつた海は又物凄く光景を呈して來た折角眠むいのを辛抱して來たのだから空しく歸るも残念と二人ながらスツバダカとなつて向ふ針巻勇ましくあつばれ船頭を氣取つて舟にのり艦をこぎながら松浦川を下つて川口に向ふた。強風は沖から吹き來りかて潮は満潮時にて烈しい勢で矢の如く川口に流入してゐるので俄仕立ての船頭さんの手にたへねばこそ船はキリ／＼舞をして大きな船の船側に吹きつけらるゝやら錨繩にからまれるやら散々の目に逢うた渡船場の若主人の骨折で川口だけは出る事が出來た。それから二人で交る交るにこいで雨と風と浪の三つに苦しめられつゝ、總濱院裏に着いたこゝで部員一同の助けを得て舟を岸に引上げてホット一息。

雨益々加はりし故水泳練習中止す。

岡本、内田の兩君急用にて歸省す。

七月廿一日 晴天。

來會者 佐藤、栗屋、河野、篠田、  
歸省者 濱田

昨日とはうつて變つた好天氣とて級外の人々の級定めとして樽廻りをやつた。受試者十四名。

午後始めて小堀流の教授あり。足撃、面つけ足撃。煽足までの教授あり各自熱心に練習した。

七月廿二日 曇後晴

旭日昇るにつれて乱雲散り南風吹きて海は穩かである午前十時より一哩の遠泳を行つた。南風のため海水の冷かなる事たびたびしかつたにかゝはらず一人の落伍者もなかつた。

一哩遠泳成功者

犬塚、宇木、高折、渡邊、古賀、原田、橋崎、影浦、野中、  
江島、古川、峯、辻、江口、樋渡、町野、張、藤山、篠田、  
栗屋、河野、神崎、川上、木谷、

七月廿三日 晴天。

來會者 土岐、小野、池田、

西風曉露を拂うて涼しかつた今日は水泳練習を止めて鏡山登山をした。令宿を發したのが午前八時一行

二十名、麓の茶屋で鶏卵饅頭を注文してたいて登山した。ロマンチックなあの松浦佐世姫の領巾振松の下で休憩する。眺望には最高の天気であつて壹岐對馬はたろか朝鮮まで見へさうであつた。烏帽子の燈臺はあれ姫島はこれと一々指摘し得たのはうれしかつた。松浦の清流。長蛇の如く走る汽車、二里に連なる虹の松原皆目を樂しませ心を酔はせいつまで眺めてもあきさうになかつた。險しい坂をすべりつゝ、ころびつして下り茶屋の二階で注文の饅頭を食べ歸宿したのは正午頃であつた。午後は午前の疲れもあれはとて練習隨意とした。

七月廿四日 晴天。

來會者 中村、大野、石川、政本、

本日午後一時半より三哩遠泳舉行す海濱院より徒歩で二軒茶屋に至り師範より注意ありて左の如き隊伍にて入水す

頭川賀田時野邊橋浦中野田島  
先古古原神町渡真影野川池江  
塚 犬 篠 田 木 谷  
口 張 樋 川 藤 宇 辻 檜 粟 土 小 峯  
度 上 山 水 奇 屋 岐 野

二軒茶屋より入水して濱崎に向ふ豫定なりしも潮流のために妨げられて進むを得ず一時間の間二軒茶屋沖に浮んでゐた。そこで遂に方向を變へて満島へ向うた部員非常な元氣にて午後四時三十五分満島へ上陸徒歩にて海岸をゆく人舟にて歸る人等ありて一同合宿につきしは五時三十分兼て用意の汁粉にて口を甘くし食膳につきては炊夫をグルグル舞させた。野中君數日前よりの下痢のため落伍したのみとは元氣驚くべしだ。

七月廿五日 晴天

佐藤林賀氏は我が水泳部の恩人である。毎年毎年水泳部員のために盡力して下さるので万事に便宜を得る事が莫大である殊に本年は自炊團の野菜や魚の買入れが困難であると御話したら又心配して下さつて野菜は監獄署から魚は魚會社から取る様にして下さつた。

午前早抜手の教授あり午後練習。  
午後六時より大茶話會を開く會する者二十八名、唐津より佐藤林賀氏青木前水泳部委員も來會盛會であ

つた。

歸省者 池田

來賓者 池上、中山

七月廿六日

晴天

午前五哩遠泳準備として約一町の樽と樽との間を廻る事廿五回に及ぶ。午後早抜手と手繰遊との試験ありその結果熊本政木、江島、野中四級に進級

七月廿七日

晴天

水泳部を開きて二週間にならうとするのたもの印度人の出来るのも無理はない又脊を林檎の様にして痛がつてゐる新米も大分あるやうだ

午前飛臺や舟を出して巻足の稽古を始む又師範より水書の教授あり。

午後も各自の練習に任す。部員の団体競泳馬落しなご大分水になれたためか水上の遊戯が盛んになつて来た。佐藤林賀氏の世話で澤山の鯛が手に入つたので部員の顔にニコニコの條が出てゐるのが見れた

七月廿八日

晴天

今日も亦遠泳準備で樽廻りをやつた。午後練習後は又無邪氣な遊戯で面白く日を暮した。

七月廿九日

晴天

歸省者 宇木、犬塚

東方漸く曙けて海波焼くが如く、曉風を孕みて走れる白帆、いつ見ても捨てられんのは朝景色の松浦渚だ。

今日は六哩遠泳をやる事になつてゐたので皆早くから起きて準備にかゝつてゐる

午前九時三十分海岸集合師範より遠泳につきての注意ありそれから隊伍を偏成して入水した時に午前九時五十五分であつた、総員廿四名でその隊伍は左の如し

川田崎邊 浦中野 野上島  
古原神 影野河 大池江

木谷 篠田 政木

江口 山山 岐野 賀新  
江根 藤藤 中辻 上水 古高峯

警備、指揮のため二艘の舟には、師範と助手細川、佐藤、兩氏分乘して出發した。

第一の命令出づ曰く「先頭の目標は軍艦島の右端」但し軍艦島とはその形より名付けたので眞實の名は神集島である、部員一同揃ひの白い水泳帽をつけて一絲

亂れず整然と隊伍を整へ二列縦隊に進みゆく壯觀を見んものど海岸に集ふ群集の驚嘆の聲は我等の元氣を増さしめた。十時十五分高島右端に目標變せらる同二十分又同島左端にの命あり同十一時三十七分目標大島右端との命あり同十二時又鳥島を目標として進めどありこゝに於て部員皆驚いた今日は高島まで行くのだと思つてゐたのに唐津の西の濱に行くのか知らんと泳ぎ出して二時間餘漸く腹の虫が食べたいととききりに騒ぎ出したので船から用意してあつた甘粥を食べさせてくれた腹が出来たので元氣はつたがこの時少し風が出て小波が起つて來たので大に弱る者が出來た。十二時二十分中山君が上船してより同二十五分に池上、五十五分に張の兩君上船した。先頭の目標は西の濱の中央との命があつたのは十二時三十分であつたこの時我々は愈西の濱に行くのだなと思つたこの方向變換の結果烈しい逆潮に向ふ事となつたのでエイ／＼聲を出して泳ぎゆく部員の元氣はすばらしいものであつたこの勇敢なる光景を見て脾肉の感に堪へなかつたと見へて張君又ザンブと水中に跳びこんで隊列についた然し冷かき潮流

に遭遇したため又上船の止むなきに至らしめたのは残念だつた。一時二十分最後の命があつた即ち先頭の目標は高島の右端と聞わたいくら穩かでも玄海の波は高い。高島へ近づくとつれ間斷なく寄せ來る波は顔にぶつつかつて口や鼻から潮の御見舞をうけた疲れて來た時の波だもの大分飲んで腹をふくらし人もあつた、二時四十五分一同高島に着いた水泳部萬歳を三唱して同島右端の神社に憩ふたその間に余と細川助手は石川君と共にボテト一の徵發に奔走したが一個も手にする事が出来なかつたので駄菓子で腹をつくつて一同二艘の船に分乗して合宿さして歸途についた。

この時天氣が又變つて風が吹いて波が高くなつた。泳いでをつた間にこんな波に襲はれようものなら玄海の潮水は飲み干す位飲まねばならなかつたであらふ

六哩遠泳成功者如左、

古川、原山、神崎、海邊、影浦、野中、川野、大野、江島、篠原、江口、峯、政木、種澤、藤山、土岐、小野、古賀、高析、木谷、

七月卅日 曇天、

狂瀾怒濤は岸を打ちてその勢の猛烈さ練習どころか命をさられさうなあれかたであつた

師範の注意で午前午後の練習を中止した、しかしさしもの狂瀾怒濤をものともせず飛び込んで濤乗濤よけ濤くゞり等の術を練習する勇者があつたのは痛快だつた、

七月卅一日 曇天、

歸省者 野中、渡邊、

海神尚狂ふて止まず練習中止。部員外出するあり、ピンポン、王突又大に盛んであつた。

八月一日 曇天

北風すさんで山の様な濤は岸をうち轟々の音は耳を聳せんばかりで練習は隨意とした、

用事で歸省してゐた、大塚君來り栗屋土岐歸省した

八月二日 晴天 風強

來會者、古城、原、松隈、肥後

歸省者、篠出、古賀

天晴れたが風は依然として吹て濤は高く練習が出来ないので隨意とした

午前古川君の案内で白壁教授御台息同道にて合宿所

御訪問せられた、

午後岡村教授御來訪部員一同欣然として喜んだ  
昨日歸省した栗屋途中から友人の肥後を同道して引返して來た

八月三日 晴

波浪尚止まず練習は中止とした午前十時三十分から白壁、岡村兩教授の歓迎會を開いた、白壁教授より菓子、岡村教授より西瓜の御寄贈あり大に盛會であつた。大塚岡村教授の御出發を見送つた。

來會者、渡邊毅

歸省者 高析、

八月四日 晴天

海は毎日毎日荒れてばかりゐるので練習も出來ずぶらく暮すのもつまらんことだと思つたので芳の谷炭坑見物に出掛けた同行十三名大塚、佐藤、原、木下、荒木、肥後、古川、峯、辻、栗屋、中山、楡崎木谷、

午前十一時唐津發の列車にのり山本驛に下車した道程十町芳の谷についたのが正午過であつた

先輩石川豊記君の嚴父が坑長であつたので大に優待

せられ晝食の馳走をうけた事務員の案内で坑内の諸機械、諸建築等を見物して同所を去つた

歸途唐津古川君の邸宅で水泳部員一同招待せられてゐたので同君宅を訪問して大に馳走になつて歸つた

八月五日 晴天

水泳部長野々口教授には御令息並に高安君同道にて御訪問あり部員の喜びこれに過ぎず水泳部を開いて三週間この間の熱心なる練習の結果は大に見るべきものありで午前水泳練習には水書等をした部員の書いた水書は紀念として部長にさしあげた、

午後一時から野々口部長の歓迎會を開いた集まり會するもの廿有餘名。大に盛會であつた、部長から西瓜の御寄贈があつた。

八月六日 晴天

本日は兼てより待ちに待ちたる唐津新報社主催の遊覽船の出る當日である

天氣はどうかと心配してゐたが最上の好天氣で灣内の靜かなことは青疊を敷きつめた様であつた。午前七時過小蒸汽船が迎へに來る事になつてゐたので早朝から起きて万事の準備をして今やたそしと待つて

ゐるところに小蒸汽船にひかれて萬國旗で飾られた二艘の遊覽船は着いた。

佐藤林賀氏は世話掛となつて遊覽船に乗り込んでゐられたので、あつく御禮を申上て一同上船した船はひかれて西の濱金波樓下についたころでも大分見物人が乗船したがその中に白壁教授、野々口教授、同令息及び高安、樋渡、張、小野君等も見れた船は又引かれて西唐津に着ころで三艘の遊覽船と數艘の荷物船とは佐賀丸と云ふ小蒸汽船にひかれて遊覽の途についた。時に午前八時で鏡の如き海の中を白波を立て進んだ

かの神功皇后征韓の途に上る時始めて船を寄せしと云ふ神集島の左をすゝむ同島神集灣の一端にある住吉神社や立神の奇巖など手にとる様に見える日露の役露船ウスリーの座礁沈没せしも立神附近なりと云ふ事だ

鼓の温泉をかすかに左に眺めつゝ船は七ツ釜についた。天下の勝地。七ツ釜は眼前にあり六角柱の玄武岩絶壁をなし七ツの洞窟水を湛へるを見ては健兒の肉ふるはざるを得ん我が水泳部の快男子辻君眞先に



躍り込んだ五高龍南の健兒あに一人ならんやで泡沫消わやらの中我も亦水中の人となつたつゝいて佐藤原、川野の三君又とび入り水泳部鍛の腕をふるつて洞穴をくつた。船は再び進んだ近かく右手高島燈台や鯨のよくとれるといふ小川島をながめて進む中前方に呼子の港名古屋城址は手に取る様に近づいた船は田島についた佐世姫を祭れる國幣中社田島神社あり一同上陸晝食をなして參拜佐世姫が化せしと云ふ神石も拜見遊ばして再び乗船島帽子の燈台にいつた。玄武岩上白色の燈台雄大なるその景壯嚴なる風光。雲濺々たる、はるか向ふに見ゆる島々。黒煙をはいて進む汽船の影。悠々たる波。あゝ一として吾人の精神に崇高の念を生せしめんものはない。海國男子たる者の一度は見るべきところだと思つた燈台に上つて親しく見物して又乗船名残をしくも島帽子島を一周して出發、暗雲ひくゝたれて四圍只燈火のみ見ゆる午後七時西の濱に歸着一同萬歳を三唱して解散して合宿にと歸つた。

遊覽船乗船者如左、但部員

犬塚、栗屋、佐藤、辻、原、中山、檜崎、渡邊、肥後、川上、

坂田、川野、古城、張、小野、樋渡、木谷

八月七日 晴天

風また出で、怒濤岸を洗ひ練習出來ず白壁教授本日午前歸郷の途につかれた部員代表として木谷、古川唐津驛に見送つた、

午後野々口教授又出發せられた青木、川野兩君部員を代表して見送つた、

八月八日 晴

歸省者 古城、肥後、

空には一点の片雲はないが風ひどく灣内又狂亂して練習が出來なかつた。

八月九日 晴天、

數日の間荒れに荒れ狂いに狂うた灣内も今日はそよ吹く風もなく漣さへも立たぬ位の風となつた。

朝霧は深くたちこめて沖には漁師の船をこぐ掛聲のみが聞けてゐた。

明日一日で水泳部は閉會となるのであると思へば何となく心細い氣がして明日又海が荒れたなら十哩の遠泳はどうしようかと皆心配して好天氣ならん事を祈つた。愈々明日十哩遠泳を決行する事と定めたの

で各自、自重して皆非常な意氣込であつた。

八月十日 晴天、

筆で飯食ふ積りでないから人の感嘆する様な名文をものし得る筈はないが、である式で十哩遠泳の壯舉をかくのも何だかあまり、物たらぬ氣がするので長い六尺の身軀から長たらしい文句をはき出して抑く然り面して式につづつて見よう。

激怒せる波浪岸邊に渦き一見肌骨を寒からしめし日健兒水に入りしは何故ぞ、空を浸せる唐津灣潮満々として碧膏を湛へ浪遙かの外洋に連なり白帆点々たりし日健兒水に入りて腕を鍛へしは何故ぞ。十哩遠泳に鍛へし腕をふるひ天晴れ海國男子の意氣天下に示さんためなりしに外ならず

鴉公しきりになきて空をどび鷄鳴遠近に聞わて夢破らる蹶起戸を排すれば陽光翠松を射て滴露五彩の珠玉をなし朝風そよそよと吹き來りて眠氣を拂ふ。眸を放てば淡霧茫として煙海漠々たり岸に横はる舟あり汀に遊ぶ鷗あり一望万頃水平にして細波漾々として漁舟を弄しさしにも廣き唐津灣も正に是れ一青氈に過ぎざるの感あり、十哩遠泳の聲に健兒は勇みた

ちて準備をさくたこたりなし。

午前九時三十分海濱院裏の海岸に集合隊列につく。

右翼(先頭より)峯、中山、古賀、小野、渡邊、辻、粟屋、政木

中軍 犬塚 木谷

左翼(先頭より)古川、原、張、川上、樋渡、川野、檜崎

救助兼指揮船には佐藤清熊君と鎮西の勝地を踏査せし陸上の勇將天崎君の二人屈強の船頭三人を従へて船にのる、

九時三十四分第一の命下る曰く「高嶋の右端を目ざして進め」と。十七名の勇士隊伍堂々と海に入る、進む事約六七町「オーイ〜」と云ふ叫聲後方に聞ゆ誰人かと見れば我が部の達者江口勢太君なり濱崎の自宅に歸り居しも本朝發せし部よりの電報を手にして駆けつけしなりきやがて隊列に追ひつき中軍の殿となる、赤色の地に白の校章と龍南會水泳部と染めぬきたる部旗は指揮船上に翻り部員のかぶれる白の水泳帽は列に並びて進む様天下の壯觀なり海濱院、新茶屋、二軒茶屋の海岸に雲集せる見物人を見ては戰士の元氣いよいよ加はる。廿五日間の練習の効果驚くべし一町の距離を泳ぐに息を切らせし人々も早

や泳術を會得して手足の動かしかた調子よく易々と泳ぎゆく十一時十五分正に高島右端に達せんとする時第二の命下る曰く「先頭の目標大島の右端」と、方向サツと變る、十二時過る事十五分甘粥を興ふとの命あるや船をさして泳ぎ集まる様餓れたる群の群るゝが如し。十二時四十分原君疲れて上船するやつどいて中山君又上船す時に午後一時二十分。

同三十五分大島右端に着せんとする時又命下る西唐津東端を目ざして進めど。氷砂糖に口を甘めて進む之れより頻々として命下る、一時五十分金波樓（西之濱）二時二十分鏡山頭巾振松（二時三十分）握飯山（之れは山形によりての假名）二時四十分、高島右端つゝいて二時五十分大島右端、かく命令につけて方向を變へて進む中いつしか鳥島を一周し終りぬ再び「目標西の濱金波樓」の命下りぬ午后四時十五分隊列を變じ一列横隊となる。十哩の遠泳に疲れたる時の展開とて充分なる勇氣と餘裕あるにあらざれば期の如き隊形にて進む事を得ん以て部員の元氣想察すべし西の濱には美しき、バラソルや海岸を駈る人の影見ぬそめぬ健兒が肉ふるひ心臓の鼓動又高さ

を覺ゆ。さしもの遠泳に少しの疲れの色も見せず悠々と西の濱に着陸時に午后四時三十二分海濱院裏を發して水中の人たりし事七時間あゝ何等の痛快ぞや。

佐藤林賀氏や帝大生石川君外一氏等に迎へられし時の嬉しさ、水泳部萬歳を三唱して一同上船萬歳を交換しつゝ西の濱を立ち海濱院にかへる、炎天にさらせし健兒の顔は一日にして印度人となり目ばかり異様の光を放つものすごさ。

あゝ健兒が樂しみとせし十哩遠泳の壯舉は天の助けと部員の非常なる元氣とにて成功しぬ吾が水泳部開始以來かつてなき十六名と云ふ多數の成功者を出したるは吾が水泳部の名譽のみならず吾が校の名譽なり鎮西に覇を唱ふる龍南健兒の英氣を天下に示せるなり、この名譽を博せし十六名の勇士の名を列舉して部報最後のページを飾らん。十六名の勇士如左

大塚、峯、古川、古賀、張、川上、小野、渡邊毅、橋渡、辻、栗屋、川野、江口、檜崎、政木、木谷、

附記

九月江津湖上にて唐津鯉の腕を示さんと準備してあながら天

候のために妨げられて時機を失したのは残念であつた。  
終りにのぞん愛吾が部のために盡力せられし諸氏の勢に對し  
あつく謝意を表す。

大正元年役員及部員如左

部長 野々口勝太郎、

師範 加藤貞雄、

助手 青木市郎、細川隆志、佐藤清熊、岡本礼、

委員 犬塚赫夫、木谷義英、

部員 宇木甫、高析茂、渡邊一郎、濱田彌三郎、古賀慶藏、

内田益城、原田恭介、檜崎敏夫、影浦尙視、野中嗣雄、

江島秀、古川俊勝、峯六郎、樋渡肥佐雄、町野一、

張管雄、藤山清、篠田重忠、粟屋静、川野浩、

江口勢太、土岐政夫、小野龍一、池田東洋、神崎勝久、

川上英雄、中村徳之、大野謙次郎、政木守之、柴田官一、

中山廉、池上龍雄、坂田静夫、石川豊記、松隈國健、

古城辰貞 原 撰、肥後丈夫、渡邊毅、辻誠助、

雜報

龍南會委員移動

都合の爲め去る二月七日龍南會委員中左の諸君辭任  
せらる。

總務部 山本龜市 松井淺市

演説部 長船義熊  
雜誌部 湯川蜻洋 高安三次  
山下雅實

劍道部 中村政記

柔道部 堀川俊夫

野球部 古賀龍雄 原源六

庭球部 行本多賀藏

端艇部 正成人 木谷義英

水泳部 犬塚赫夫

右補缺として新に職に就かれしは

總務部 土岐政夫 長尾恒介

演説部 宮田正明 城戸甚次郎

雜誌部 下林一之

劍道部 竹下武雄

柔道部 原薫治

野球部 熊谷覺行

庭球部 橋本寛一

水泳部 山崎賢興 鹽足武

山田福治